

同	九年	九〇〇	一、〇六三	六一六	九六八	二、四一五	九八〇
同	十年	九五〇	一、八六〇	七〇六	一、〇七五	一、九七五	九八〇
同	十一年	九九一	一、二二二	一、一〇一	一、一八三	一、七四六	一、一〇〇

備考

鹽田價格ニハ釜屋其ノ他ノ附屬設備ヲ包含ス

第六節 鑑定

鹽ノ鑑定ハ常時肉眼鑑定ニ依リ肉眼ニ依リ難キ場合及再鑑定ニ在リテハ分析試験ニ依レリ

肉眼鑑定ハ比準標本鹽ニ對比シ眼識ニ依リ品位ヲ鑑別スルモノナルヲ以テ之ニ従事スル者ノ眼識ハ十分ニ練達セシムルノ要アリ分析試験ニ在リテハ其ノ方法ヲ一定シ之カ精確ヲ期セリ

鹽及海水、鹹水其ノ他鹽務ニ關スル分析試験ハ特ニ定メタルモノノ外左ノ分析法ニ依ルコトト爲セリ

鹽務ニ關スル分析法 (明治四十年十一月 甲第七一〇五號達)

第一章 鹽分析法

第一條 約二瓦ノ可檢鹽ヲ攝氏百三十五度乃至百四十度ニ於テ一時間乾燥シ其ノ減量ヲ以テ水分トナスヘシ

但シ五等以下ノ鹽ニ在テハ適量ノ可檢鹽ヲ採リ硫酸加里ト共ニ蒸餾水ニ溶解シ蒸發乾涸シテ攝氏百二十五度乃至百三十五度ニ於テ乾燥シ恒量ヲ得ヘシ

第二條 九乃至十瓦ノ可檢鹽ヲ蒸餾水ニ溶解シ豫メ攝氏百度乃至百五度ニ於テ乾燥シ秤量シタル濾紙上ニ不溶解ノ物質ヲ集メテ洗滌シ百度乃至百五度ニ於テ乾燥秤量シ不溶解分トナスヘシ

第三條 十八乃至二十瓦ノ可檢鹽ヲ蒸餾水ニ溶解シ二百立方「センチメートル」トナシ濾過シ清澄ナル濾液ヲ得ヘシ

第四條 二百立方「センチメートル」ノ第三條ノ濾液ヲ取り亞爾加里性ヲ呈スレハ硝酸ヲ以テ中和シ蒸餾水ヲ加ヘテ二百立方「センチメートル」トナシ其ノ二百二十五立方「センチメートル」ヲ取り格魯誤酸加里液ノ一二滴ヲ加ヘテ標示藥ト爲シ十分ノ一定規硝酸銀

鹽專賣 鹽ノ收納 鑑定

液ヲ以テ鹽素ヲ定量スヘシ

第五條 適量ノ第三條ノ濾液ヲ取り必要アレハ稀釋シ鹽酸ヲ加ヘテ酸性ト爲シ煮沸シ加熱シタル鹽化重土液ヲ加ヘテ硫酸ヲ硫酸重土トシテ沈澱セシメ數時間放置シタル後沈澱ヲ濾紙上ニ集メ沸湯ヲ以テ洗滌シ洗滌カ鹽素ノ反應ヲ呈セサルニ至リ沈澱ヲ乾燥シ熾灼シ秤量シテ硫酸ヲ定量スヘシ

第六條 適量ノ第三條ノ濾液ヲ取り鹽化安母尼亞及安母尼亞並に碳酸若ハ碳酸安母尼亞ヲ加ヘテ二十四時間放置シ石灰ヲ碳酸石灰トシテ沈澱セシメ沈澱ヲ濾紙上ニ集メテ蒸餾水ヲ以テ洗滌シ洗滌カ鹽素ノ反應ヲ呈セサルニ至リ沈澱ヲ乾燥シ之ヲ濾紙ヨリ丁寧ニ剝離シ先ツ濾紙ヲ燒キ後沈澱ト共ニ熱シテ白金坩堝ノ底部カ少シク紅熾スルヲ度トシ二三十分間ノ後冷却シテ濃厚ノ碳酸安母尼亞ヲ加ヘテ潤ホシ弱ク熾熱シ秤量シテ碳酸石灰トシテ石灰ヲ定量スヘシ

第七條 第六條ノ濾液及洗液ヲ合シテ其ノ量多キニ過クレハ蒸發シテ減容シタルモノノ適量ヲ取り必要アレハ鹽化安母尼亞及安母尼亞ヲ加ヘ後磷酸曹達ヲ加ヘテ苦土ヲ磷酸安母尼亞苦土トシテ沈澱セシメ之ヲ濾紙上ニ集メ二乃至二、五「パーセント」ノ安母尼亞液ヲ以テ洗滌シ洗液カ鹽素ノ反應ヲ呈セサルニ至リ沈澱ヲ乾燥シ沈澱ヲ先ツ濾紙ヨリ丁寧ニ剝離シ濾紙ヲ充分ニ灰化シ次に沈澱ト共ニ坩堝内ニ於テ強ク熱灼シテ焦性磷酸苦土トシテ苦土ヲ定量スヘシ

第八條 第五條ノ濾液及洗滌ヲ合シテ必要アレハ蒸發シタルモノノ適量ヲ取り安母尼亞及碳酸安母尼亞並に碳酸若ハ碳酸安母尼亞ヲ加ヘテ石灰、苦土及重土ヲ沈澱セシメ其ノ沈澱ヲ濾シ別ケ濾液ノ適量ヲ取り蒸發乾燥シ赤灼シ蒸餾水ニ溶解シ碳酸ヲ加ヘテ再ヒ蒸發乾燥シ赤灼シテ安母尼亞鹽ヲ除キ蒸餾水ニ溶解シ鹽酸ヲ加ヘテ蒸發乾燥シ蒸餾水ニ溶解シ不溶解ノ物質アレハ濾過シ濾液ノ適量ヲ取り鹽化白金ト共ニ蒸發シ一容ノ九十容量「パーセント」ノ酒精及五分ノ一乃至六分ノ一容ノ依的兒ノ混和液ヲ加ヘ一時間放置シ加里ヲ鹽化白金加里トシテ沈澱セシメ豫メ攝氏百二十度乃至百二十五度ニ於テ乾燥秤量シタル濾紙上ニ集メ同一ノ混和液ニテ洗滌シ百二十度乃至百二十五度ニ於テ乾燥シ秤量シテ加里ヲ定量スヘシ

但シ一 濾液ノ適量ヲ取ラスシテ適當ノ方法ニ依リテ沈澱ヲ洗滌シ其ノ洗滌ト濾液トヲ合シテ次ノ操作ニ移ルモ差支ナシ
二 溶液ノ適量ヲ分取スル場合ニ於テハ初メ溶液ヲ一定重量トナシテ其ノ一部分ヲ重量トシテ分取スルモ一定容量トナシタルモノヨリ其ノ一部分ヲ容量ニテ分取スルモ差支ナシ

三 又ハ別ニ第三條ノ濾液適量ヲ取り法ノ如クシテ硫酸ヲ除キタル後加里ヲ定量スルモ妨ナシ
第九條 總鹽素量ヨリ石灰、苦土及加里ニ結合スル鹽素ヲ除キ其ノ殘數ヲ以テ曹達ニ結合スル鹽素トナスヘシ
第十條 沃度、臭素及碳酸ハ方法ノ定メラレサル間ハ之ヲ定量セス

但シ一 硝酸ヲ存スルトキハハウルシユ氏法ニ依リテ定量スヘシ

二 沃度副産鹽ノ如キ炭酸亞爾加里ヲ含有スルモノニアリテハ可及的少量ノ檢體ヲ取りテ二分ノ一定規鹽酸液ヲ以テ其ノ亞爾加里ヲ檢定シ炭酸鹽トシテ算出スヘシ

第二章 海水分析法

第一條 二百五十瓦ノ可檢海水ニ蒸餾水ヲ加ヘテ二百五十立方「センチメートル」トナシ濾過スヘシ
第二條 二十立方「センチメートル」ノ第一條ノ濾液ヲ取り亞爾加里性ヲ呈スレハ硝酸ヲ以テ中和シ蒸餾水ヲ加ヘテ二百立方「センチメートル」トナシ其ノ二十五立方「センチメートル」ヲ取り鹽分析法第四條ノ方法ニ依リ十分ノ一定規硝酸銀液ヲ以テ鹽素ヲ定量スヘシ

第三條 第一條ノ濾液各適量ヲ取り鹽分析法第五條、第六條、第七條及第八條ノ方法ニ依リ硫酸、石灰、苦土及加里ヲ定量スヘシ
第四條 鹽分析法第九條ノ結合法及第十條ノ注意ニ依リ曹達ニ結合スル鹽素ヲ計算スヘシ

第三章 藻垂分析法

第一條 二百五十瓦ノ可檢藻垂ニ蒸餾水ヲ加ヘテ二百五十立方「センチメートル」トナシ濾過シ清澄ナル濾液ヲ得ヘシ
但シ可檢藻垂濃厚ニシテ二百五十瓦ヲ取ルハ多キニ過クルト認ムルトキハ其ノ量ヲ減スルコトヲ得

第二條 二十立方「センチメートル」ノ第一條ノ濾液ヲ取り亞爾加里性ヲ呈スレハ硝酸ヲ以テ中和シ蒸餾水ヲ加ヘテ二百立方「センチメートル」トナシ其ノ二十五立方「センチメートル」ヲ取り鹽分析法第四條ノ方法ニ依リ十分ノ一定規硝酸銀液ヲ以テ鹽素ヲ定量スヘシ

第三條 第一條ノ濾液各適量ヲ取り鹽分析法第五條、第六條、第七條及第八條ノ方法ニ依リ硫酸、石灰、苦土及加里ヲ定量スヘシ
第四條 鹽分析法第九條ノ結合法及第十條ノ注意ニ依リ曹達ニ結合スル鹽素ヲ計算スヘシ

第四章 鹹水分析法

第一條 二百瓦ノ可檢鹹水ニ蒸餾水ヲ加ヘテ五百立方「センチメートル」トナシ濾過シ清澄ナル濾液ヲ得ヘシ
但シ可檢鹹水ノ濃度ニ依リテハ其ノ採取量ヲ増減スルコトヲ得

第二條 二十立方「センチメートル」ノ第一條ノ濾液ヲ取り亞爾加里性ヲ呈スレハ硝酸ヲ以テ中和シ蒸餾水ヲ加ヘテ二百立方「センチメートル」トナシ其ノ二十五立方「センチメートル」ヲ取り鹽分析法第四條ノ方法ニ依リ十分ノ一定規硝酸銀液ヲ以テ鹽素ヲ定量スヘシ

第三條 第一條ノ濾液各適量ヲ取り鹽分析法第五條、第六條、第七條及第八條ノ方法ニ依リ硫酸、石灰、苦土及加里ヲ定量スヘシ
第四條 鹽分析法第九條ノ結合法及第十條ノ注意ニ依リ曹達ニ結合スル鹽素ヲ計算スヘシ

第五章 苦汁分析法

第一條 百瓦ノ可檢苦汁ニ蒸餾水ヲ加ヘテ五百立方「センチメートル」トナシ濾過シ清澄ナル濾液ヲ得ヘシ

但シ可檢苦汁ノ濃度ニ依リテハ其ノ採取量ヲ増減スルコトヲ得

第二條 二十立方「センチメートル」ノ第一條ノ濾液ヲ取り亞爾加里性ヲ呈スレハ硝酸ヲ以テ中和シ蒸餾水ヲ加ヘテ二百立方「センチメートル」トナシ其ノ二十五立方「センチメートル」ヲ取り鹽分析法第四條ノ方法ニ依リ十分ノ一定規硝酸銀液ヲ以テ鹽素ヲ定量スヘシ

第三條 第一條ノ濾液各適量ヲ取り鹽分析法第五條、第六條、第七條及第八條ノ方法ニ依リ硫酸、石灰、苦土及加里ヲ定量スヘシ

第四條 鹽分析法第九條ノ結合法及第十條ノ注意ニ依リ曹達ニ結合スル鹽素ヲ計算スヘシ

第六章 「コーラ」分析法

第一條 可檢「コーラ」ノ適量ヲ取り粉碎シテ能ク混和シ可檢品ヲ調製スヘシ

第二條 二乃至二、五瓦ノ第一條ノ可檢品ヲ取り乳鉢内ニテ蒸餾水ヲ以テ充分丁寧ニ淘汰シツツ悉ク微細ノ粉末トナシ蒸餾水ヲ加ヘテ約百立方「センチメートル」トナシ時々攪拌シツツ約十分間弱ク煮沸シタル後全液ヲ一定量トナシ濾過シ濾液ノ適量ヲ取り亞爾加里性ヲ呈スレハ硝酸ヲ以テ中和シ一定量トナシ其ノ適量ヲ取り鹽分析法第四條ノ方法ニ依リ十分ノ一定規硝酸銀液ヲ以テ鹽素ヲ定量スヘシ

第三條 一、五乃至二瓦ノ第一條ノ可檢品ヲ取り乳鉢内ニ於テ蒸餾水ヲ以テ充分丁寧ニ淘汰シツツ悉ク微細ノ粉末トナシ蒸餾水ヲ加ヘテ百乃至百五十立方「センチメートル」トナシ鹽酸ヲ加ヘテ時々攪拌シツツ二三十分間弱ク煮沸シ硫酸石灰ヲ溶解セシメ蒸餾水ヲ加ヘテ稀釋シ冷却シ二百瓦若ハ二百立方「センチメートル」トナシ濾過シ濾液ヲ別器ニ取り不溶解ノ物質ヲ豫メ攝氏百二十度乃至百二十五度ニ於テ乾燥シ秤量シタル濾紙上ニ集メテ洗滌シ攝氏百二十度乃至百二十五度ニ於テ乾燥シテ秤量シ不溶解分トナスヘシ

第四條 第三條ノ濾液各適量ヲ取り鹽分析法第五條、第六條及第七條ノ方法ニ依リ硫酸、石灰及苦土ヲ定量スヘシ

第五條 第二條ノ濾液適量ヲ取り硫酸ヲ除キタル後鹽分析法第八條ノ方法ニ依リ加里ヲ定量スヘシ

但シ第四條ノ硫酸ヲ定量スル場合ニ得タル濾液及洗液ヲ合シ之レヨリ加里ヲ定量スルモ差支ナシ

第六條 鹽分析法第九條ノ結合法及第十條ノ注意ニ依リ曹達ニ結合スル鹽素ヲ計算スヘシ

第七章 石炭分析法

第一條 可檢石炭凡ソ二瓦ヲ秤取シ攝氏百度乃至百十度ニ於テ一時間乾燥シ其ノ減量ヲ以テ水分トナスヘシ

第二條 可檢石炭凡ソ二瓦ヲ白金坩堝ニ秤取シ「ブンゼン」燈（「ブラスト」燈ヲ代用スヘシ）ニテ熱シ坩堝蓋縁ニ於ケル火焰ノ消滅スルニ及ヒ直ニ吹管焰（「ロシヤランプ」ヲ代用スヘシ）ニ移シ四分間灼熱シ冷却後殘留物ヲ秤量シ之ヲ骸炭ノ量トナシ可檢石炭ノ量ヨリ骸炭及水分ノ量ヲ減シ揮發物ノ量トナスヘシ

第三條 可檢石炭三乃至五瓦ヲ白金坩堝ニ秤取シ徐々ニ熱灼シ終ニ炭素質ヲ認メサルニ至リ冷却秤量シ其ノ重量ヲ以テ灰分トナスヘシ

第四條 可檢石炭凡ソ二瓦ヲ白金皿ニ秤取シ四倍量ノ炭酸曹達ト少許ノ酸化苦土トノ混合物ヲ加ヘ徐々ニ熱灼シテ其ノ表面灰色ヲ呈スルニ至リ弱赤熱トナシ尙一時間持續シ冷却後之ヲ水ニ溶解シ濾過洗滌スヘシ其ノ濾液及洗液ヲ合シ之ニ鹽酸ヲ加ヘテ酸性トナシ鹽化重土ヲ以テ硫酸ヲ定量シ硫酸量ヲ算出スヘシ

第五條 可檢石炭凡ソ五瓦ヲ秤取シ炭酸曹達ノ濃溶液ヲ加ヘテ沸騰セシメ濾過洗滌スヘシ其ノ濾液及洗液ヲ合シ鹽酸ヲ加ヘテ酸性トナシ鹽化重土ヲ以テ硫酸ヲ定量シ不揮發性硫酸量ヲ算出スヘシ

第六條 總硫黃量ト不揮發性硫黃トノ差ヲ揮發性硫黃ノ量トナスヘシ

第七條 トムソン氏熱量計ニ依リ發熱量ヲ測定スヘシ

石炭分析法註釋

第一 本法ハ石炭中ノ水分、揮發物、骸炭、灰分、總硫黃量、揮發性及不揮發性硫黃ヲ定量シ且ツ其ノ發熱量ヲ測定スルモノトス

第二 可檢石炭採收方法

可檢石炭ノ採收方法ハ最重要ニシテ若シ其ノ方法當ヲ得サル時ハ試驗方法完全ナリト雖其ノ成績ハ正鵠ヲ失スヘシ故ニ可及的之ヲ完全ナラシメンニハ試驗セントスル石炭ヲ可成多クノ箇所ヨリ採集スヘシ（若シ大塊ナル時ハ適宜ニ粉碎シ其ノ一部ヲ取り他ノ部分ニ混スヘシ）而シテ粉碎シテ豆大トナシ能ク混和シ其ノ一部ヲ取り稍々微細ナル粉末トナシ更ニ能ク混和シ其ノ中ヨリ數十瓦ヲ取り更ニ微細ナル粉末トナシテ（瑪瑙亂鉢ヲ使用スルヲ可トス）分析ニ供スヘシ

第三 水分

水分ヲ檢定センニハ可檢石炭凡ソ二瓦ヲ時計皿ニ秤取シ攝氏百度乃至百十度ニ於テ一時間乾燥シ時計皿ヲ以テ之ヲ蓋ヒ「クリツプ」ヲ以テヨク固定シテ秤量シ其ノ減量ヲ以テ水分ノ量トナスヘシ實驗ニ依レハ其ノ重量ノ輕減ハ一時間後ニ於テ最大ニシテ其レ以上ニ及フ時ハ却テ増加スルヲ普通トス故ニ更ニ二十分乃至三十分間乾燥セシメ後再ヒ秤量シ其ノ輕キモノヲ採ルヘシ

第四 揮發物及骸炭

可檢石炭凡ソ二瓦ヲ白金坩堝ニ秤取シ「ブンゼン」燈（「ブラスト」燈ヲ代用スヘシ）ニテ熱シ（火焰ノ長サハ「ブンゼン」燈ノ高サト

鹽專賣

鹽ノ收納

鑑定

同一位ニシ且火焰ノ上端カ坩堝底ニ接スル位ヲ程度トス。坩堝蓋縁ニ於ケル火焰ノ消滅スルニ及ヒ冷却セシメスシテ直ニ「プラ
スト」燈（ロシヤランプ）ヲ代用ス（ヘシ）ニ移シ四分間赤熱シ冷却後殘留物ヲ秤量シ之ヲ骸炭ノ量トナシ可檢石炭ノ量ヨリ骸炭
及水分ノ量ヲ減シ揮發物ノ量ト爲スヘシ

第五 灰分

第四試驗ニ於ケル骸炭ヲ用ヒテ充分燃焼シ其ノ殘留物ヲ灰分トシテ定量スルコトヲ得ルモ該骸炭ハ容易ニ灰化シ難キヲ以テ新
ニ可檢石灰ヲ取り試驗ニ供スルヲ便トス即チ三乃至五瓦ヲ白金坩堝ニ秤取シ徐々ニ熱シ一時ニ高熱ヲ與ヘスシテ空氣ノ供給ヲ
充分ナラシメ終ニ炭素質ヲ認メサルニ至リ冷却シテ殘留物ヲ秤量シ灰分トナスヘシ

第六 總硫黃量

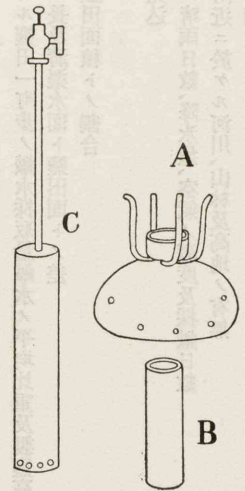
石炭ニ含メル硫黃ハ硫酸鹽、硫化鐵若ハ含硫有機物トシテ存在スルモノナリ硫酸鹽ハ主トシテ硫酸石灰ニシテ燃焼ノ際灰分中
ニ殘留スルモ硫化鐵若ハ含硫有機物ハ、亞硫酸或ハ硫酸トナリテ瀝罐或ハ釜底ヲ侵蝕スルコトアルヲ以テ注意ヲ要ス其ノ總硫黃
ヲ檢定セムニハ可檢石炭凡ソ二瓦ヲ白金皿ニ秤取シ四倍量ノ無水炭酸曹達（硫酸或ハ硫化物ヲ含有セサルモノ）ト少許ノ酸化苦
土トノ混合物ヲ加ヘ能ク混和シ徐々ニ熱スヘシ若シ急ニ熱スル時ハ硫黃ヲ逃散セシムルノ恐アリ而シテ其ノ表面灰色ヲ呈スル
ニ至リ弱赤熱トナシ尙一時間持續ス然ル時ハ硫黃ハ悉ク硫酸鹽類ニ變化スルヲ以テ之ニ蒸餾水ヲ加ヘテ溫メテ溶解濾過シ其ノ
濾液及洗液ヲ合シテ鹽酸ヲ加ヘ酸性トナシ普通方法ニ依リ硫酸ヲ定量シテ硫黃ノ量ヲ算出スヘシ

第七 揮發性及不揮發性硫黃

可檢石炭凡ソ五瓦ヲ秤取シ炭酸曹達（硫酸或ハ硫化物ヲ含有セサルモノ）ノ濃溶液ヲ加ヘテ沸騰セシムル時ハ硫酸鹽ハ硫酸曹達
ニ變スルヲ以テ之ヲ濾過シ其ノ濾液及洗液ヲ合シ鹽酸ヲ加ヘテ酸性トナシ普通方法ニ依リ硫酸ヲ定量シ硫黃ノ量ヲ算出スル時
ハ不揮發性硫黃ヲ得ヘシ總硫黃量ヨリ不揮發性硫黃ノ量ヲ減シ揮發性硫黃ノ量ヲ算出スヘシ

第八 發熱量

發熱量ハトムソン氏熱量計ニ依ル其ノ方法左ノ如シ
本熱量計ハ圖ノ如キ裝置ニシテ



A 眞鍮製台
 B 銅製管
 C 銅製蓋筒
 D 硝子製円筒

之ヲ要スル酸化劑ハ乾燥セル鹽素酸加里三分及硝酸加里一分ノ混和物ニシテ先ツ粉末トナシタル可檢石炭二瓦ヲ秤リ此ニ酸化劑二十瓦ヲ加ヘ能ク混和シテ銅管ニ入レ(少シ宛輕打シツツ全量ヲ投入スヘシ)導火線(普通綿糸ヲ硝酸加里ノ濃溶液ニ浸漬シテ乾燥シタルモノ)ヲ挿入シ點火ニ備フルモノトス今銅管BヲAナル臺上ニ安置シCナル蓋筒ヲ固定ス而シテ後之ヲ二千立方センチメートルノ水ヲ盛りタル硝子圓筒D中ニ投シ數回上下シ溫度ヲ均等ナラシメ檢溫器(攝氏一度ノ十分ノ一迄測定シ得ルモノ)ヲ以テ其ノ溫度ヲ測定ス(試驗時ニ於ケル水温ハ室温ヨリ低キヲ要ス)而シテ該器ヲ水中ヨリ出シ銅蓋ヲ取去リ導火線ニ點火シテ再ヒ速ニ銅蓋ヲ固定シ同時ニ水中ニ投入ス然ル時ハ直ニ燃燒起リテ瓦斯ハ下方ノ小孔ヨリ出テ水中ヲ通過シテ逃散シ約一分間ニ結了スヘシ燃燒終了後二三分間放置シ上部ノ活嘴ヲ開キ水ヲ其内部ニ浸入セシメ且ツ器ヲ上下シテ水ノ溫度ヲ均等ナラシメタル後其ノ最高溫度ヲ測定ス茲ニ測定シタル溫度ト最初測定シタル溫度トノ差即チ上昇溫度ニ其ノ一割ヲ加ヘテ之ニ壹千ヲ乘シタルモノハ可檢石炭ノ發熱量ナリ本裝置ニ於テハ該器ニ吸收セラルヘキ熱量ハ上昇溫度ノ一割ト認定スルモノトス例ヘハ上昇溫度七度ナル時ハ其ノ發熱量ハ

鹽專賣 鹽ノ收納 鑑定

(7.0+0.7)×1000 即チ七千七百「カロリー」トナルヘシ

第八章 鹽田土壤分析法

理學的性質檢定法

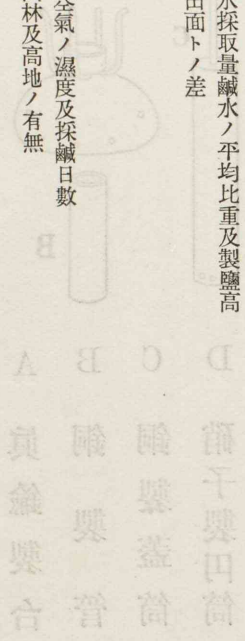
第一條 可檢土壤ノ採集法

可檢土壤ハ其ノ鹽田全體ヲ代表スヘキモノナルヲ以テ若各所其ノ性狀ヲ異ニスル時ニハ其ノ各所ニ於テ採集スルノ必要アリト雖先ツ一般ニハ其ノ鹽田中全體ヲ代表シ得ヘキ百乃至一千坪ノ地ヲ撰定シ對角線ヲ引キ其ノ交叉點ト對角線上同點ヨリ二分ノ一ノ點ト五箇所ニ於テ先ツ撒砂ヲ去リ相混セサル様地盤ノ各層ニ就テ各約五百匁ノ土壤ヲ採集シ各層毎ニ別々ニ能ク混和スヘシ尤モ撒砂ト鹽田上層土ト異ナル場合ニハ撒砂ヲモ採集スヘシ

但シ深サ二尺以内ニアル層ニ限り標本ヲ採集スヘシ
是ノ如ク採集混和セル土壤ノ内ヨリ可檢品トシテ各凡ソ一貫匁内外ヲ取り陶製皿ニ擴ケ日乾シ或ハ攝氏三十乃至四十度ニ於テ乾燥シ風乾態トナシ各密閉保存スヘシ(且各層ヲ明記スヘシ)

又土壤採集地ニ就キ可成左ノ事項ヲ記入スルコト

- 一 採集者ノ氏名
- 二 鹽田濱名、地番及所有者氏名
- 三 採集年月日
- 四 鹽田面乾濕ノ狀況及撒潮ノ有無
- 五 鹽付ノ狀況
- 六 前年度ニ於ケル鹽田一町歩ノ鹹水採取量鹹水ノ平均比重及製鹽高
- 七 溝渠ノ巾、深、長及溝渠水面ト鹽田面トノ差
- 八 溝渠面積ト鹽田面積トノ割合
- 九 鹽田ノ年齡
- 十 鹽田ノ等級見込
- 十一 一箇年間ノ晴雨日數、降水量、空氣ノ濕度及採鹹日數
- 十二 地勢特ニ附近ニ於ケル河川、山林及高地ノ有無
- 十三 鹽田地盤ノ構造



十四 鹹水ノ成分

第二條 石礫及細土

第一條ノ風乾土一「キログラム」ヲ取り孔径四「ミリメートル」ノ篩ニテ篩別シテ能ク混和シ直ニ壘ニ入レ密閉シ置クヘシ之ヲ細土ト云フ篩ヲ通過セサル塊粒ハ指頭ニテ碎キツツヨク洗滌シ之ニ附著セル細土ヲ去リ風乾後秤量ス之ヲ石礫ト云フ

第三條 直徑三、一、「ミリメートル」ノ細土及細微土

第二條ノ細土五百「グラム」ヲ取り孔径〇、五「ミリメートル」ノ篩ニテ篩別シ直ニ壘ニ入レ密閉シ置クヘシ之ヲ細微土ト云フ篩ヲ通過セサル細土ハ水ニテ能ク洗滌シ細微土ヲ去リ風乾シタル後更ニ孔径三、一、「ミリメートル」ノ篩ニテ篩別シ各其ノ重量ヲ秤量スヘシ

第四條 直徑〇、五乃至〇、二五 〇、二五乃至〇、一〇 〇、一乃至〇、〇五 〇、〇五乃至〇、〇一及〇、〇一「ミリメートル」以下ノ細微土是等ノ細微土ヲ分ツニハ左ノ洗滌分析法ニ依ル

洗滌分析法

第三條ノ細微土五十「グラム」ヲ陶製皿ニ入レ凡ソ三百乃至五百立方「センチメートル」ノ水ヲ加ヘ凡ソ一時間煮沸シ時々攪拌シ充分土塊ヲ崩壊シ又熱湯ヲ加ヘテ常ニ減水量ヲ補フト同時ニ木片等ノ混在スルトキニハ土壤ノ損失ナキ様洗滌除去シ靜置冷却スルヲ待チテ上液ハ「シエーネ、オルト」洗滌器ノ大ナル圓筒管ニ移シ殘餘ノ澱渣ハ小ナル圓筒管ニ全ク洗ヒ移シ「ビーツメートル」ヲ連結シ第七條ニ示ス圖ノ如キ裝置ヲ施シ左記ノ水流速度ヲ以テ分離スヘシ

第一回 一秒時間毎ニ〇、二「ミリメートル」(IIノ圓筒管内ニ於テ)

但シ右ノ速度ニテ流出セル土壤ハ直徑〇、〇一「ミリメートル」以下ノモノトス

第二回 同ニ「ミリメートル」(同上)

但シ右ノ速度ニテ流出セル土壤ハ直徑〇、〇一乃至〇、〇五「ミリメートル」ノモノトス

第三回 同七「ミリメートル」(Iノ圓筒管ニ於テ)

但シ右ノ速度ニ於テ流出セル土壤ハ直徑〇、〇五乃至〇、一「ミリメートル」ノモノトス

上記ノ各水流速度ニ於テ「ビーツメートル」ヨリ流出セルモノヲ大ナル陶製圓筒或ハ「ピーカー」ニ受ケ流出スル水カ全ク清澄トナルニ及ヒ水流ヲ止メ流出セル水ヲ靜置シ能ク沈定セシメ上澄液ヲ「サイフオン」ニテ除去シ其ノ澱渣ヲ集メ大ナル陶製皿又ハ硝子皿ニ移シ水浴上ニテ乾燥シ次ニ空氣浴中ニテ攝氏百五度乃至百十度ニテ乾燥シ更ニ二乃至三日間天秤室内ニ放置シ風乾態トシテ秤量スヘシ又第二回ヲ終リタル時ハ大ナル圓筒ヲ取外シ其ノ中ニアル土壤ヲ總テ小圓筒中ニ移シ法ノ如ク第三回ノ速度ヲ以テ分

離スヘシ

洗滌器内ニ残留セル砂粒ハ其ノ儘靜置シ上澄液ヲ「ピベット」ニテ除去シ陶製皿或ハ硝子皿ニ移シ前同様風乾態トナシ秤量シ更ニ孔径〇・二五「ミリメートル」ノ篩ニテ篩別シ秤量スヘシ

第五條 十以上、十乃至八 八乃至六一及六乃至四「ミリメートル」ノ石礫第一條ノ石礫ヲ各十、八及六「ミリメートル」ノ篩ニテ篩別シテ各秤量スヘシ

第六條 洗滌分析成績記載方左ノ如シ

一、原土百分中

十「ミリメートル」以上%
十乃至八「ミリメートル」%
八乃至六「ミリメートル」%
六乃至四「ミリメートル」%
四乃至三「ミリメートル」%
三乃至二「ミリメートル」%
二乃至一「ミリメートル」%
一乃至〇・五「ミリメートル」%

洗滌器内ニ残留セル砂粒ハ其ノ儘靜置シ上澄液ヲ「ピベット」ニテ除去シ陶製皿或ハ硝子皿ニ移シ前同様風乾態トナシ秤量シ更ニ孔径〇・二五「ミリメートル」ノ篩ニテ篩別シ秤量スヘシ

第五條 十以上、十乃至八 八乃至六一及六乃至四「ミリメートル」ノ石礫第一條ノ石礫ヲ各十、八及六「ミリメートル」ノ篩ニテ篩別シテ各秤量スヘシ

第六條 洗滌分析成績記載方左ノ如シ

一、原土百分中

十「ミリメートル」以上

十乃至八「ミリメートル」

八乃至六「ミリメートル」

六乃至四「ミリメートル」

四乃至三「ミリメートル」

三乃至二「ミリメートル」

二乃至一「ミリメートル」

一乃至〇・五「ミリメートル」

.....%

.....%

.....%

.....%

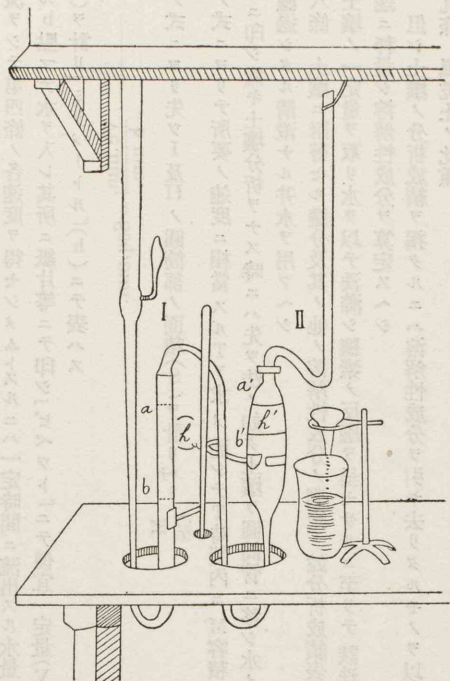
.....%

.....%

.....%

.....%

清水



第七條

水流速度測定法

- C 一秒時間ニ於ケル水流速度(「ミリメートル」ニテ表ハス)
 - S 圓筒ノ斷面積(平方「ミリメートル」ニテ表ハス)
 - M 水ノ一定量(立方「ミリメートル」ニテ表ハス)
 - T M容積ヲ流出スルニ要スル時間(秒ニテ表ハス)
- 〇、五乃至〇、二五「ミリメートル」……………%
- 〇、二五乃至〇、一「ミリメートル」……………%
- 〇、一乃至〇、〇五「ミリメートル」……………%
- 〇、〇五乃至〇、〇一「ミリメートル」……………%
- 〇、〇一「ミリメートル」以下……………%

鹽專賣 鹽ノ收納 鑑定

$$CS = \frac{M}{T}$$

$$T = \frac{M}{CS}$$

此ノ方程式ニヨリテ適宜ノ速度ヲ求ムルコトヲ得ヘシ例セハ毎秒二「ミリメートル」ノ速度ヲ得ントスルニハ

M ヲ「リットル」即チ「〇〇〇、〇〇〇立方「ミリメートル」トス

S ヲ「〇〇〇平方「ミリメートル」トス

C ヲ毎秒二「ミリメートル」トス

$$T = \frac{M}{CS} = \frac{1,000,000}{2,000 \times 2} = 250 \text{ 秒} = 4 \text{ 分} 10 \text{ 秒}$$

即チ四分十秒ニテ「リットル」ヲ流出セシムレハ所要ノ速度ヲ得ルナリ

水流ヲシテ第四條ノ各速度ヲ得セシムトスルニハ一定時間ニ流出スル水量ヲ計ルニアリサレハ洗滌器ヲ圖ノ如ク裝置シ先ツ圓筒部ナルb點マテ水ヲ入レ其所ニ紙片等ニテ印シ「ピベット」ニテ便宜一定量(V)ノ水ヲ加ヘ其ノ高サヲ印ス假ニ之ヲaトス、水ノ高サ(ab)ヲ計リ「ミリメートル」(h)ニテ表ハス

$$Vc \cdot mm. = Ssq. \cdot mm.$$

$$h \cdot mm. = Ssq. \cdot mm.$$

此ノ式ニヨリ先ツI及IIノ圓筒部ノ面積(S)ヲ計ツ $T = \frac{M}{CS}$

右ノ式ニヨリテ所要ノ速度ニ相當スルTヲ求メ而シテT時間内ニM容積ヲ流出セシムル水ノ高サヲ測定シ之ヲ「ピーツメートル」ニ印シ置キ土壤分析ヲナス時ニハ先ツ法ノ如ク土壤ヲ圓筒管ニ移シ水ノ高サヲ其ノ印マテ昇ラシムレハ其ノ速度ヲ得ルナリ水ハ濾過シタル清澄ナル井水ヲ用フヘシ

第八條 土壤ニ附著セル鹽分及其ノ他ノ溶解性成分ノ測定 竝分析成績表示

土壤ノ一定量ヲ取り水ヲ以テ洗滌シ鹽素ノ反應ヲ呈セサルニ至リテ該洗液ヲ一定容量トナシ其ノ一定容量ヲ分取シ蒸發乾涸シ速ニ秤量シ溶解性成分ヲ算定スヘシ

但シ土壤ノ分析成績ヲ掲クルニハ溶解性成分ヲ引キ去リタルモノヲ以テ算出スヘシ

第九條 風乾土ノ比重

(二)(一)

百立方センチメートルノ比重壺ヲ能ク乾カシ攝氏十七度半ノ水ヲ充テ秤量ス其ノ重量ヲBトス

細微土ノ一定量(二十五乃至五十)グラムニ秤量シテ陶製皿ニ入レ之ニ適量ノ水ヲ加ヘ砂皿ノ上ニテ加熱シ攪拌シ毫モ氣泡ノ生セサルニ至リ前項ニ於テ使用セシ比重壺ニ能ク洗ヒ移シ攝氏十七度半ノ水中ニ於テ水量ヲ整定シ清潔ナル手巾ニテ能ク拭ヒ乾カシ秤量ス此ノ重量ヲTトシ左ノ方法ニヨリテ比重ヲ算定スルモノナリ

$$(B+S) - T = S^w$$

$$\frac{S}{S^w} = G.$$

但シSハ土壤ノ重量

SWハSナル重量ノ土壤ト同容積ノ水ノ重量

Gハ比重

第十條 乾燥土壤ノ比重

土壤ノ一定量(二十五乃至五十)グラムニ秤量シテ其ノ中ノ水分ヲ檢定スヘシ而シテ左ノ算法ニヨリテ比重ヲ求ム

$$A - M = X$$

$$\frac{A \times S^w}{S} - M = Y$$

$$\frac{X}{Y} = G'$$

但シAハ土壤ノ一定重量

Mハ土壤A「グラム」中ニ含有セル水分ノ重量

Xハ乾燥土壤ノ重量

Yハ乾燥土壤ト同容積ノ水ノ重量

G'ハ乾燥土壤ノ比重

第十一條 容積比重

(A) 土壤ノ粗ナル状態ニ於ケル容積比重

百立方センチメートルノ容積ヲ有スル黃銅製圓筒ニ細微土ヲ入レ机上ニテ三度靜カニ輕ク叩キ其ノ空所ニ細微土ヲ滿テ秤

鹽專賣 鹽ノ收納 鑑定

量スルコト少クモ五回以上之ヲ行ヒ其ノ平均重量ヲ求ムヘシ
 (B) 土壤ノ密ナル状態ニ於ケル容積比重
 前項同様ニ細微土ヲ取り机上ニテ内容ノ減セサル迄ニ圓筒底ヲ叩キ填充秤量スルコト五回以上ニシテ其ノ平均重量ヲ求ム
 ヘシ

粗密兩状態ニ於ケル土壤ノ容積比重ハ前二項ニ於テ得タル土壤百立方「センチメートル」ノ重量ヨリ其ノ中ニ含有スル水分量
 ヲ減シ百ヲ以テ除シタルモノトス

第十二條 孔竅ノ容量

粗密兩状態ニ於ケル土壤ノ容積比重ニ百ヲ乘シタルモノ即チ風乾細微土百立方「センチメートル」ノ重量ヨリ其ノ中ニ含有セル
 水分量ヲ減シタルモノヲ第十條ノ比重ニテ除シ得タル容積ヲ更ニ百ヨリ減スルトキハ細微土百立方「センチメートル」中ニ存ス
 ル孔竅ノ容量ヲ得ヘシ

第十三條 含水量

直徑五、五「センチメートル」、高五「センチメートル」ノ硝子圓筒兩箇ヲ重ネ兩圓筒ノ接著部ヲ外圍ヨリ紙ニテ糊定シテ密ニ相接
 合セシメ又圓筒ノ一端ニ濾紙ヲ當テ更ニ寒冷紗ニテ被ヒ麻糸ヲ以テ固ク結ヒ之ヲ底トシ器中ニ細微土ヲ盛り粗ナル状態ノ場合
 ニハ机上ニ三回靜カニ叩キ密ナル状態ノ場合ニハ減容セサル迄机上ニ於テ叩キテ填充シタル後廣キ陶製皿ニ立テ皿中ニ深サ約
 二「センチメートル」ノ水ヲ注キ此水カ土壤ノ表面ニ浸潤シ顯ハルル迄ニ要スル時間ヲ檢シ二十四時間ノ後圓筒ヲ水中ヨリ取出
 シ糊著セル部分ヲ切離シ雙方ヨリ各約三乃至五「グラム」ノ土壤ヲ二回取出シテ其ノ重量ヲ檢シ更ニ之ヲ攝氏百五度乃至百十度
 ニ於テ乾燥シ恒量トナス

斯ノ如クニシテ得タル水分ノ量ヲ乾燥土壤ノ重量ニテ除シ百ヲ乘スルトキハ土壤百「グラム」ニ對スル含水量(重量トシテ)ヲ得
 ヘシ而シテ更ニ此ノ含水量ニ容積比重ヲ乘スルトキハ土壤百立方「センチメートル」中ノ含水量(容量トシテ)ヲ得ヘシ

第十四條 大氣ノ透通量

一、最高ノ大氣透通量ハ孔竅ノ容量ヨリ含有水分ヲ減シテ得タルモノヲ以テス
 二、最低ノ大氣透通量ハ孔竅ノ容量ヨリ含水量(容量トシテ)ヲ減シテ得タルモノヲ以テス

第十五條 十「センチメートル」ノ高サニ水ヲ吸上スル時間

第十三條中土壤ノ表面ニ蒸餾水ノ到達スルニ要シタル時間ニ依リテ之ヲ定ム

二人以上ノ鑑定人カ鑑定シタル場合ニ於ケル鑑定成績ハ各鑑定人ノ鑑定成績ヲ平均シ小數ハ第三位ヲ四捨五入シテ決定ス(明治四十五年三月甲第七二二號通牒)

再鑑定ハ成ルヘク當分ノ鑑定者以外ノ吏員ヲシテ當ラシムルコトトシ技術員ノ配置ナキ場合ニ在リテハ多少ノ時日ヲ要スルモ申立人ニ異議ナキ限り附近ノ收納官署ニ送致シ若ハ技術員ヲ出張セシメ施行スルコトト爲セリ

再鑑定ニ依リ品質ノ等級カ最初ノ鑑定ノ等級ヨリ上進セサリシ場合申立人ノ負擔スヘキ再鑑定費用ニ付テハ左ノ規定ニ依ル(明治三十八年四月省令第二十七號)

第四條 鹽專賣法施行細則第二十條第四項ニ依リ再鑑定申立人ノ負擔スヘキ費用ハ鑑定人ノ手當旅費及再鑑定ニ要シタル實費トス而シテ其ノ實費額ハ一件七十五錢トナセリ(明治四十三年八月)

鹽再鑑定ニ於テ當業者カ分析試驗ニ立會スル場合ニ在リテハ左記準則ニ依レリ

鹽鑑定人立會心得(準則) (明治四十三年二月
甲第三二二號通牒)

第一條 再鑑定申請人ニシテ分析試驗ニ立會セムトスルトキハ其ノ旨直ニ當該官吏ニ申立ツヘシ

第二條 代理人ヲ定メ立會セシメムトスルトキハ委任狀ヲ携帶セシムヘシ但シ當時納付代理人ヲ定メ其ノ權限ヲ委任セルモノハ此ノ限ニ在ラス

第三條 立會人ハ當該官吏ノ指示ニ從ヒ一定ノ場所ニ著席シ立會中ハ言語動作ヲ慎ミ猥ニ席ヲ離レ又ハ雜談ヲ試ミ苟モ喧騒ニ涉ルコトナキヲ要ス

第四條 立會人ハ猥ニ室内ノ機械藥品又ハ可檢品等ニ手ヲ觸ルヘカラス

第五條 當該試驗事項ニ關シ質疑ノ要アルトキハ特ニ試驗執行後關係官吏ニ申出ツルヲ要ス

鹽ノ鑑定ニ付テハ常ニ其ノ實狀ヲ明ニスル爲左ノ報告ヲ徵セリ

鹽製造及鑑定實蹟報告 (明治四十二年四月
甲第一四三九號達)

鹽專賣 鹽ノ收納 鑑定

鹽 製 及 鹹 採										區 分		
製鹽場數	重 比 水 鹹			量 鹹 採			數 日 鹹 採			入 濱 鹽 田	揚 濱 鹽 田	
	何月	何月	何月	何月	何月	何月	何月	何月	何月			
ノ	鹹水煎熬ノモ	度	度	度	石	石	石	日	日	日	又ハ、比重大平均採鹹量又ハ、比重大平均採鹹量	日數、石數一段歩當日數、石數一段歩當日數、石數一段歩當日數、石數一段歩當日數
ノ	海水直煮ノモ				合	合	合					
ノ	鹹泉直煮ノモ	度	度	度	石	石	石	日	日	日		
	沃度副産鹽				合	合	合					
	計	度	度	度	石	石	石	日	日	日		

明治何年第何期分鹽製造及鑑定實蹟報告
 提出日
 何專賣支局長 印

備 考

採鹹操作連續日數別度數
 何月中
 十日以上 何度
 三日以上 何度
 一日以上 何度
 (記載例)
 一、採鹹日數ハ採鹹ニ際シ鹽田全部ヲ使用スル地方ト其ノ一部ヲ使用スル地方トニ拘ラス現ニ鹹水ヲ採收シタル日數ヲ掲グスルモノトス
 二、採鹹量ハ調査期間中實際採取シタル鹹水量ヲ(檢査簿中ハ當業者ノ帖簿等ニ依リ)鹹水比重ハ管內ヲ通シ最モ普通ト認メタルモノヲ製鹽高ハ收納シタルト然ラサルトニ拘ラス實際製造セラレタルモノヲ(檢査簿又ハ營業者帖簿等ニ依リ)各之ヲ別ニ調査掲グスルモノトス
 三、製鹽場數及人員ハ各調査期最終月末現在ヲ掲グスルモノトス但シ二種以上ヲ製造スルモノニ在リテハ、主ナル一方へ墨書シ他ハ朱書スルモノトス
 四、一段歩平均採鹹量ハ各月末現在シタルモノヲ掲グスルモノトス
 五、採鹹操作連續日數別度數ハ各調査期間中各月別ニ調査シ兩月ニ跨リ連續シタルモノアルトキハ翌月中ノ調査

員人付納及數

再鑑定										員人付納及數		
再鑑定ノ結果										計	等外鹽	五等鹽
三等級ヲ下降シタルモノ	二等級ヲ下降シタルモノ	一等級ヲ下降シタルモノ	原等級等シキモノ	一等級ヲ上進シタルモノ	二等級ヲ上進シタルモノ	三等級ヲ上進シタルモノ	再鑑定ヲ請求シタルモノ	區分	何月			
										何月	何月	何月
										件數	件數	件數
										數量	數量	數量
										斤	斤	斤
										何月	何月	何月
										件數	件數	件數
										數量	數量	數量
										斤	斤	斤
										何月	何月	何月
										件數	件數	件數
										數量	數量	數量
										斤	斤	斤

三、煎熬釜數、按手及見習員現在數ハ各調査期最終月末日現在ヲ掲上スルモノトス但シ煎熬釜數ハ鹽田製鹽ニ係ルモノノミ付掲上スルモノトス

四、鑑定件數中分析鑑定ニ依ルモノハ之ヲ當該欄左傍ニ内書朱記スルモノトス

五、納付人員ハ同一人ニシテ同時ニ數等級ノ鹽ヲ納付シタルモノアリタルトキハ數量ノ最多キ一方ニ墨書シ他ハ朱書スルモノトス

六、鑑定件數及納付人員ハ指定引渡ノモノヲモ計入スルモノトス

再鑑定請求回数別人員

一回 請求シタルモノ 何人

二回 請求シタルモノ 何人

三回 請求シタルモノ 何人

(記載例)

一、合計件數及數量ハ之ヲ再鑑定請求原等級別ニ内譯シ備考ニ掲記スルモノトス

二、第四期分報告ニハ再鑑定請求回数別人員ハ一箇年ヲ通シタル總數ヲモ備考ニ附記スルモノトス

組 理 命 ノ シ タル モ	人	員	人	件 數	件	數量	斤 (記載例)
							一、同一人ニシテ數回處理ヲ命セラレタルモノハ數人トシ計算スルモノトス 二、前欄記載例ハ本欄ニ準用ス

備考

一、本調査ハ左記月中ニ於ケル實蹟ヲ調査シ、七、十月及翌年一月十五日限報告スルモノトス

第一期 一月乃至三月

第二期 四月乃至六月

第三期 七月乃至九月

第四期 十月乃至十二月

二、本調査ハ直轄及出張所各別ニ調製シ尙其ノ總括表ヲ調製添附シ報告スルモノトス

支那局長會議ニ際シ左記注意ヲ爲セリ(大正三年五月)

一九 鹽ノ鑑定ニ關スル件

鹽ノ鑑定ハ主ニ肉眼ノ鑑識ニ依ルコトトナリ居ルモ肉眼鑑識ノ孰達ト正確トハ常時分析ヲ行ヒ其ノ地方産鹽ノ外觀ト其ノ實質トノ關係ヲ明カニスルニアラサレハ得テ期スヘカラス故ニ技術官ニ對シテハ其ノ鑑定シタル鹽ニ付屢次分析ヲ行ハシメ以テ鑑識ノ修養ニ努ムヘシ

鑑定實蹟報告ヲ改正ス

甲第二五〇三號長官達(大正三年六月二十二日)

鹽製造及鑑定實蹟ハ別紙様式ニ依リ前期分ハ十月十五日、後期分ハ四月十五日限り報告スヘシ
明治四十二年四月達甲第一四三九號ハ之ヲ廢止ス

鹽專賣 鹽ノ收納 鑑定

粗悪 鹽處 理命 令狀 況					再 鑑 定 狀 況																	
計	其 他	色 相 不 良 ノ モ ノ	夾 雜 物 多 量 ノ モ ノ	水 分 多 量 ノ モ ノ	區 分	請 求 人 ノ 負 擔 ニ 屬 ス ル 再 鑑 定 費 額	再 鑑 定					再 鑑 定 ヲ 請 求 シ タ ル モ ノ										
							果 實	一 等 級	一 等 級	原 等 級	二 等 級	再 鑑 定	再 鑑 定	再 鑑 定	再 鑑 定	再 鑑 定	再 鑑 定	再 鑑 定				
						円	二 等 級 下 降	一 等 級 下 降	原 等 級	一 等 級 上 進	二 等 級 上 進											
				斤	處 理 ヲ 命 ジ タ ル																	
				件 數	月 別		九 (三) 月	八 (二) 月	七 (一) 月	六 (十二) 月	五 (十一) 月	四 (十) 月										
				數	件 數 內 譚																	
九 (二) 月	八 (二) 月	七 (一) 月	六 (十二) 月	五 (十一) 月	四 (十) 月																	

鹽專賣 鹽ノ收納 鑑定

調査例

一 鹽田製鹽ニ關スル採鹹及煎熬狀況

(一) 採鹹日數ハ直轄、出張所、派出所等ノ平均ヲ掲記スルモノトス但シ直轄、出張所、派出所毎ノ採鹹日數ハ其ノ區域内ヲ

通シ現ニ採鹹ヲ爲シタル日數ニ據ルモノトス

(二) 採收、煎熬、鹹水量ハ製鹽検査簿若ハ鹽業者ノ記録等ニ據リ所管内ノ實蹟總量ヲ調査スルモノトス

(三) 採收鹹水比重ハ適宜ノ方法ニ依リ其ノ地方ニ於テ普通ト認ムヘキモノヲ調査スルモノトス

(四) 焚上鹽ニ對スル納付見込高ハ製鹽検査簿等ニ據リ各月ノ焚上鹽ニ對スルモノヲ調査スルモノトス

二 製鹽種類別納付高及鑑定件數

(五) 鹽納付高及鑑定件數ハ鹽製造高臺帳、鹽納付書等ニ依リ實蹟ヲ調査スルモノトス

(六) 差鹽焚ニ於ケル注加苦汁割合ハ所轄内ヲ通觀シ其ノ概況ヲ知ルヲ目的トシ調査スルモノトス

三 再鑑定狀況

(七) 前年同期ニ比シ再鑑定ノ請求著シク増減アリタルトキハ其ノ原因ヲ調査シ備考ニ附記スルモノトス

四 粗惡鹽處理命令狀況

(八) 前年同期ニ比シ處理ヲ命シタルモノニ著シキ増減アリタルトキハ其ノ原因ヲ調査シ備考ニ附記スルモノトス

(九) 包裝不良ノ故ヲ以テ更裝ヲ命シタルモノノ内仕舞方不良ニ因ルモノアリタルトキハ左傍ニ内書朱記スルモノトス

五 其ノ他

(十) 左ノ各項ニ對シテハ前、後期共直轄、出張所、派出所別内譯(月別)表ヲ調製シ添附スルモノトス

採鹹日數

採收鹹水量

鑑定總件數

再鑑定請求總件數

粗惡鹽處理命令總件數

大正何年度前期分鹽製造及鑑定實蹟報告附表

九月末現在煎熬釜種類別箇數

何 支 局

種類別	容量		局	所	別	箇	數	製造地及製造者
	満量	一回ノ煎然シ得ヘキ最大量						
高田式 (鑄鐵)	第一號							
	第五號							
	第六號							
井上式	第五號							
	第何號							
何 (鍊鐵)	、							
石 釜	、							
計								

調査例

- 一 本調査ハ前期分報告ニ限リ調査スルモノトス
 - 二 九月末日現在製鹽許可場數ト釜ノ箇數ト符合セサルトキハ其ノ事由ヲ備考ニ附記スルモノトス
 - 三 釜ノ製造地、製造者名等ハ前年度ト等シキモノハ記入ヲ略スルモ差支ナシ
- 大正何年度後期分鹽製造及鑑定實績報告附表

區	分		直轄	何出張所	何派出所	計	備	何	友	局	考
	採鹹地面積	製造場數									
本年度間全ク休業ノモ			箇所				調査例				
			町				一採鹹最盛期ニ於テ全ク休業シタルモノノ採鹹地面積ハ外書トシテ記入スルモノトス				

鹽專賣 鹽ノ收納 鑑定

本年度ニ於ケル再鑑定請求回数別人員		本年度中處理命令ヲ受ケタル回数別人員					休業ノ主要ナル事由	
一	二	三	何	何	計	一	二	
回	回	回	回	回	回	回	回	
人	//	//	//	//	人	//	//	
一十數回ノ多ニ及ヒタルモノアルハ何々ニ因ル	一十數回ノ多キニ及ヒタルモノ(多數ナルハ)何何ニ因ル	一十數回ノ多キニ及ヒタルモノ(多數ナルハ)何何ニ因ル	一十數回ノ多キニ及ヒタルモノ(多數ナルハ)何何ニ因ル	一十數回ノ多キニ及ヒタルモノ(多數ナルハ)何何ニ因ル	一十數回ノ多キニ及ヒタルモノ(多數ナルハ)何何ニ因ル	一十數回ノ多キニ及ヒタルモノ(多數ナルハ)何何ニ因ル	一十數回ノ多キニ及ヒタルモノ(多數ナルハ)何何ニ因ル	
二何々	二何々	二何々	二何々	二何々	二何々	二何々	二何々	
調査例	一、本項ノ調査ニ當リ同一人ニシテ數製造場ヲ經營スルモノアリタルトキハ其ノ製造場毎ニ一人トシテ計算スルモノトス	一、本項ノ調査ニ當リ同一人ニシテ數製造場ヲ經營スルモノアリタルトキハ其ノ製造場毎ニ一人トシテ計算スルモノトス	一、本項ノ調査ニ當リ同一人ニシテ數製造場ヲ經營スルモノアリタルトキハ其ノ製造場毎ニ一人トシテ計算スルモノトス	一、本項ノ調査ニ當リ同一人ニシテ數製造場ヲ經營スルモノアリタルトキハ其ノ製造場毎ニ一人トシテ計算スルモノトス	一、本項ノ調査ニ當リ同一人ニシテ數製造場ヲ經營スルモノアリタルトキハ其ノ製造場毎ニ一人トシテ計算スルモノトス	一、本項ノ調査ニ當リ同一人ニシテ數製造場ヲ經營スルモノアリタルトキハ其ノ製造場毎ニ一人トシテ計算スルモノトス	一、本項ノ調査ニ當リ同一人ニシテ數製造場ヲ經營スルモノアリタルトキハ其ノ製造場毎ニ一人トシテ計算スルモノトス	

鹽ノ鑑定ニ關シ左記注意ヲ爲セリ(大正四年四月支部局長會議)

二九 鹽ノ分析ニ關スル件(大正四年四月)

鹽ノ鑑定ハ正鷲ヲ期スル爲肉眼鑑定ト共ニ分析鑑定ヲ行フヘク從來屢注意シタルトコロアリ從テ各地共相當之カ實行ニ努メタル事蹟ハ之ヲ認ムルトコロナルモ未タ完璧ヲ得タリト謂フヲ得ス向後一層技術者ヲ督勵シ分析實驗ノ技術ニ關スル研究ヲ

積マシメテ以テ肉眼鑑定ノ確實ヲ期セシムルコトニ注意スヘシ

三〇 鹽ノ再鑑定ニ關スル件(大正四年四月)

鹽ノ再鑑定ハ大體ニ於テ漸年減少ノ趨勢ニ在ルモ統計上尙多大ノ數ヲ示セルノミナラス近時却テ増加ヲ來セル地方アリ再鑑定ハ其ノ處分上多クノ手數ヲ要シ一般事務ノ進捗ニモ影響シ當業者亦相當ノ負擔ヲ爲ササルヘカラサルヲ以テ將來一層鑑定ノ練習ニ努メシメ其ノ適確ヲ期スルト共ニ一面當業者ヲシテ專賣局ノ鑑定ニ信頼セシメ以テ再鑑定ヲ減少セシムルコトニ注意スヘシ

二一 鹽ノ分析ニ關スル件(大正五年四月)

鑑定ノ敏捷ト正鵠トハ肉眼鑑定ノ習熟ニ存シ肉眼鑑定ノ習熟ハ分析實驗ト相俟テ初メテ其ノ目的ヲ達シ得ヘキモノナルニ由リ技術者ハ常ニ分析實驗ヲ行ヒテ肉眼鑑定ノ習熟ニ資シ以テ鑑定ノ敏捷ト正鵠ヲ期スル様注意スヘシ

二二 鹽鑑定ノ練習ニ關スル件(大正五年四月)

鹽鑑定ノ適否ハ當業者ノ利害ニ關スルコト極メテ重大ナルハ言フ俟タサル所ナルヲ以テ常ニ技術者ヲ督勵シテ鑑定ノ練習ニ勉メシメテ之カ熟達ヲ期シ標本ノ適用ヲ誤ルコトナク當業者ヲシテ鑑定ニ信頼シ漸次再鑑定請求ノ數ヲ減少セシムル様注意スヘシ

一五 鹽ノ再鑑定ニ關スル件(大正六年五月)

鹽ノ再鑑定ハ地方別ニ觀察スルトキハ尙多大ノ數ヲ示セルノミナラス最近却テ増加ヲ來セル地方アルハ遺憾ナリ將來一層鑑定ノ練習ニ努メテ之カ適確ヲ期シ當業者ヲシテ當局ノ鑑定ヲ信頼シ以テ再鑑定ノ減少ヲ期スルニ注意セラルヘシ

一二 鹽ノ分析試驗執行ニ關スル件(大正十年五月)

鹽ノ品質ハ原料タル鹹水ニ含有スル成分ノ如何ト鹽ノ製造時期ト製鹽方法ノ異ナルニ依テ其ノ含有成分ニ相違ヲ生スルモノナルヲ以テ規定ニ基クテ產鹽成分ノ分析以外ニ常ニ多數ノ鹽ニ就キ簡易分析ヲ執行スルハ勿論尙ホ完全分析ヲモ執行シテ其ノ内容ヲ詳細研究シ置クハ肉眼鑑定力ヲ増進セシムル所以ニシテ鑑定事務上最肝要ナル事項ニ屬ス然ルニ近來本事務ノ等閑ニ付セララルノ傾向アルハ甚々遺憾トスルトコロナルヲ以テ自今一層本事務ノ厲行ニ努メラルヘシ

鑑定件數ハ一箇年大體二十萬件内外ニシテ一件當納付高ハ少キハ一千斤未滿ノモノアルモ平均四千斤前後ニ在リ

年度	鑑定		分析鑑定	鑑定一件當納付高
	肉眼	鑑定		
大正七年度	一六〇・六五四	三三〇	四・一八七斤	
同八年度	二〇四・七三二	四九一	四・七九九	
同九年度	一八一・〇八六	一一二	三・六四五	
同十年度	一九三・八六〇	一一六	四・四二七	
同十一年度	(不明)	(不明)	(不明)	

再鑑定要求ハ大正三、四年ノ交ニ於テハ其ノ件數四、五百件ニ上リタリシモ其ノ後一般ニ鑑定ヲ信賴スルニ至リ近時ニ及ヒテハ極メテ稀ニシテ僅ニ三十餘件ニ過キス而シテ再鑑定ノ結果ハ殆ト原鑑定等級ニ等シク原等級ヨリ上進セルモノハ二、三割ヲ出テス

年度	再鑑定請求		再鑑定結果		請負人負擔 鑑定費用
	人員	件數	原等級ヨリ上進セルモノ	原等級ヨリ下降シタルモノ	
大正二年度	八五人	一〇七件	二九件	一件	五八円
同三年度	三〇九	四八一	一四一	七件	二五五
同四年度	三三三	五一二	一四九	六件	二七二
同五年度	二〇六	三〇八	五四	七件	一八九
同六年度	一〇三	一二一	二六	七件	七一
同七年度	六一	六八	一三	七件	三九
同八年度	六一	七五	一七	七件	四四

同	九年度	三四	三八	五一七	九	二九	一	二一
同	十年度	三四	三七	三一三	八	二八		二一
同	十一年度	二九	三九	三七四	一〇	二九		二〇

鑑定ノ結果納付ニ適セサル粗悪鹽ニシテ處理ヲ命シタルモノ三千件内外ニシテ其ノ鹽量ハ一千萬斤内外ニ上レリ

年度	水分多量ノモノ		夾雜物多量ノモノ		色相不良ノモノ		其ノ他		計	
	件數	數量	件數	數量	件數	數量	件數	數量	件數	數量
大正八年度	一、〇九一	三、七五五	一、五九九	三、九二二	三八一	四五九	—	六六三	二、八三二	九、八四〇
同九年度	七二三	二、四二六	一、三〇五	三、六〇三	三三九	五六〇	一三〇	六二四	二、四九一	七、二〇五
同十年度	一、二二一	五、四七七	一、六一四	六、一九三	三三八	二九六	一三七	七五四	三、二一〇	一、二、七三三
同十一年度	(不明)									

第七節 收納狀況

内地鹽ノ收納高ハ各年不同ナルモ十億斤前後ニ在リ大正七年度ハ法施行以來ノ凶作ニテ六億七千餘萬斤ニ著減シ大正十一年度ノ如キハ十一億餘萬斤ニ上リ空前ノ增收ヲ示シタリ各年度ノ増減ハ生産狀況ニ詳ニセルニヨリ之ヲ省ク賠償金額ハ一千百餘萬圓ヲ上下シタリシモ大正六、七年來賠償價格引上ノ爲漸次増額シ大正八年度ニハ三千萬圓ヲ超過シ大正十一年度ハ三千五百餘萬圓ニ上レリ

鹽指定引渡高ハ三專賣統一當時明治四十年度ニハ四千二百萬斤ノ多キヲ算シタリシモ製鹽地整理ニ依リ不便ノ産地ハ多ク製造ヲ禁止セル爲約半減シ爾後收納場所ノ増設等ニ依リ納付ノ便ヲ計リ持參收納ニ變更シタル爲大正十一年度

鹽專賣 鹽ノ收納 收納狀況